

博士論文 概要書

題 目

江藤新平と明治初期財政

ETOU Shimpei and Finance in the early period of Meiji era

氏 名 星原 大輔

博士論文 概要書

氏名 星原大輔

本論のテーマは「江藤新平と明治初期財政 明治草創期の国家形成に関する基礎的研究」である。従来、あまり注目されてこなかった明治初年の財政史の観点から、具体的には、明治元年から二年初め、つまり由利財政が展開されていた時期の江藤新平の言動を、国家財政の諸問題と絡めて考察している。

このテーマで研究を行なう意義は二点ある。

一つは、江藤研究の観点からである。彼は明治二年末以降、維新政府の要職を歴任し、様々な政策立案において、重要な役割を担うようになっていく。これは明治初年における実績によって、政府首脳の評価を得たからである。その証が、明治二年十一月の中弁就任である。しかし当初の人事案は「大蔵大輔」であった。これは、政府首脳が江藤を経済政策に長けた人物であると認識していたからであろう。つまり、江藤の明治初期の政治活動は財政に係るものであって、かつ彼の働きぶりは政府首脳から高評価に値するものであったのである。それ故、当該時期の江藤の動向は伝記研究のみならず、明治元年の政治史、財政史研究においても、等閑視することはできない。ところが、これまでの江藤研究の基礎的文献では、本論で検証対象としている明治元年から二年初めにおける、江藤の言動は充分には検証されているとは言い難い。しかし佐賀県立図書館蔵『江藤家資料』をはじめ江藤新平関係文書には、明治元年時の書翰や書類が多数残されており、当該時期の江藤の言動を検討する材料は整っている。本論では、こうした史料を用いながら検証を行なった。

もう一つは、明治財政史研究の観点からである。由利財政に関する研究論文は数多くあるが、その先駆的研究とも言うべきものが澤田章『明治財政の基礎的研究: 維新当初の財政』である。当該論著は、大蔵省が後年まとめた資料や統計、また三岡丈夫編纂『由利公正伝』などの諸伝記を基に、由利財政の実態と推移を丹念に検証したものである。それ故か、以降の研究論文は、澤田論文が利用した資料を基本的に用いて、由利財政を検証している。しかし戦後になると、江藤新平関係文書をはじめ、岩倉、三条、大久保、木戸などの個人文書が次々と公開されており、それらの文書中には、由利財政に関する書類および書翰が多数存在している。それにも関わらず、関連研究ではあまり利用されていない。こうしたことから筆

<p>者は、由利財政の実態を再検討すべきであると考えている。</p>
<p>以上のような問題意識で、明治元年から二年初めにおける江藤の言動を検証した結果、以下のような成果を得た。</p>
<p>第一に、新史料と従来見落とされてきた史料に基づいて、江藤の幕末明治初年の詳細な行動を明らかにした。中には、先行研究で既に触れられていたものもあるが、本論では、その具体的な日付や言動を明らかにし、先行研究の記述を史料的に立証した。こうしたことを丹念に追うことによって、江藤が培っていた人脈や、彼が担当していた実務の実態がより鮮明することができた。</p>
<p>第二に、江藤と由利財政の関連性である。先行研究においても触れられていたけれども、本論の検証によって、慶応四年・明治元年の江藤の政治活動は、常に由利財政と並行して行なわれていたことが明らかとなった。鎮将府の財政が逼迫する中で、江藤が金銀座の移管や長岡右京一件などの問題を処理していくのを見て、在府していた三条や大久保らは、江藤の才覚に注目するようになった。そして明治元年後期になると、由利財政の柱の一つである金札通用のあり方などをめぐって、江藤と由利の相違が顕れ始める。そして、会計官東京出張所・東京府合併論に至って、両者は激しく対立したのであった。こうした一連の言動を通して、江藤の政策立案能力、実務能力が政府内で高い評価を得るようになったことを立証した。</p>
<p>第三に、明治二年初めにおける江藤の政府内における評価を明らかにした。国会図書館憲政資料室蔵『岩倉具視関係文書』にある書類類から、江藤が同年二月末に帰藩する以前から、岩倉具視が江藤の諸能力を見込んで、自身の右腕としようとしていたことを明らかにした。慶応四年はじめには嫌疑の目を向けられていた佐賀藩は、六月にはその評価は一変していた。とりわけ岩倉は、中山忠能が「薩長よりモ多ク鍋ヲ用ヒ」としていると談じていたように、急速に佐賀藩に接近していた人物である。その多く用いられた「鍋」の一人が、江藤であった。明治二年になると、江藤は幾度となく岩倉の諮問を受けていた。つまり、明治二年二月頃には、江藤は維新政府中枢の政策に関与するだけの評価を政府首脳から得ていたのである。</p>
<p>第四に、先行研究ではほとんど用いられていなかった江藤新平関係文書の諸史料を補い、明治元年の財政の実態をより明確にした。特に強調しておきたいのは、由利が着京した日付を明らかにしたことである。これまで由利は十月二十日に東京に到着したというのが通説</p>

であって、これを前提にして、明治初期の財政史研究は展開されてきた。しかし本論で立証したように、正しくは明治元年十一月十九日夕方であった。つまり明治元年の財政を検証する上で、明治元年十月二十日から十一月十九日までの由利の言動、否、政府全体の財政活動が、長らく完全に見過ごされてきたのである。本論では、由利の当該時期の言動に注目し、複数の史料を検討した結果、由利が同年九月から財政機関の大幅な改革を目論んでいたことを明らかにした。しかしこの改革はまず大坂で大紛糾を惹起し、そして東京でも、江藤の反駁書に見られるように大反発を招いた。そしてこれが、由利財政は破綻し、由利が明治二年に政治地位を追われた理由の一つであることを明らかにした。

本論文では、以上のように、幾つかの史実を明らかにすることによって、江藤研究、明治財政史研究の分野において、新たな視点を提示することができた。